

創造性ある労働とその成果 を享受する地域社会を

池上 惇（京都大学名誉教授）



バルベリーニ会長は、労働者協同組合の成長を制約している条件の一つとして、労協に関する経済学の理論の不十分さを挙げられました。これは、その通りだと思います。

その根本には、従来の経済学では、「創造性のある労働」というものが理論化されていなかったことがあると考えられます。創造性のある労働でなければ、人びとの共感も得られませんし、「ディーセント・ワーク」の基盤も広がりません。

この創造性ある労働を、日本の労働者協同組合は、まず清掃労働の現場からつくりだしてきました。清掃労働を、働く人の健康や、ビルの中で生活する人、地域に住む人への影響からとらえ直し、安全で快適な環境をつくりだす働き方につくりかえたことです。

これは、人びとが惰性的に、利益のために働かされるのではなく、働く人が自立し、自分たちの新しい働く習慣を確立していくという視点に立ったことで、生み出された成果です。

経済学の中で、労働を人間の創造性から出発して、一人ひとりの成長・発達とのかかわりでとらえたのは、19世紀のイギリスで活躍した、ジョン・ラスキンです。ラスキンは、労働価値説（労働時間だけで商品の価値を決めたとする）と効用価値学説を批判し、商品をつくる人間の動機や創造性を問うとともに、そ

うした創造的労働を受け入れてそれを享受する生活者の力量の発達や、創造性を育てる教育の重要性を理論化しました。

今日、まさにこうした創造的な労働と、創造の成果を享受する地域社会をどうつくるかが、決定的な課題となってきています。

その中で、協同労働の協同組合が、指定管理者制度の下で次々と公共的なサービスに参入し、公務員が担っていたさまざまな領域の労働を、協同労働で担って高い評価を得ていることは、きわめて注目すべき動向です。

さらに、多くの人びとが地域から集まり、創造的労働を評価する目をもって、地域の隠された資源を次々と発見し、新しい子育てのやり方や新しい高齢社会のあり方をつくりだすとともに、新しい産業再生の方向を示していくことができるかどうか。

協同労働はとくに、教育労働に関わり、新しい資源を発見する目を育て、その資源を地域で生かしていく。その過程こそが地域を再生させます。それをなすうるとすれば、日本社会に再び大きな希望が生まれるのではないかと考えます。

しっかりと勉強していただき、すばらしい成果を地域に生かしていただきたい。